

## 追悼演奏会に寄せて

市川猿之助

長澤先生には、スーパー歌舞伎「ヤマトタケル」を創演した折、音楽をご担当頂きました。二十数年も前のことになります。御蔭様でスーパー歌舞伎は好評を頂き現在までに九作品を数えますが、壮大な実験舞台の実現は、試行錯誤の繰り返しです。そうしたなかでも特に第一作の「ヤマトタケル」には感慨深いものがございます。



そもそも先生にお願いしたのは、当時は消費税はまだなく、興行には入場税10%が課税されていましたが、歌舞伎と認定されればこれが免除されるため、是非スーパー歌舞伎も歌舞伎と認めてもらおうと、邦楽器を使った斬新な邦楽を考え、先生に作曲をお願いしました。私のイメージを伝えて音に表現して頂き、仮録音を聞きながら、何度もディスカッションを重ね、日本音楽集団の演奏などにより出来上がった曲は二百曲を超えました。

台本をもとに各パートでこうした作業を行い、出演者も稽古を重ねて歌舞伎の美意識・発想・演出法・演技術を駆使した新・新歌舞伎が完成、上演の運びとなりました。私の意図を具現化してくださった先生のご尽力によるところは大きく、誠に感謝に堪えません。先生には、続く「オグリ」「八犬伝」「カグヤ」でも音楽をご担当頂きました。

本日は、その中から懐かしい曲が聴けるとのことですので、楽しみにしております。先生を偲ぶよき集いとなりますようお祈りし、ご挨拶とさせていただきます。



「ヤマトタケル」レコードジャケット



公演後のパーティで市川猿之助氏と

## さようなら長澤さん

稲垣隆史(劇団民藝)

日本音楽集団の代表でいらした長澤さんから「竹取物語」の語り手としてご依頼を受けてから三十余年になる。以来、今日まで語り手として日本音楽集団を始め各国の演奏家と共演し続けて来られたのは、ひとえにきっかけを作って頂いた長澤さんの御蔭であると深く感謝している。若輩である私の言いたい放題にも常に優しく笑顔を絶やさず耳を傾けて下さり、この前お会いした際にも「次の作品にも是非一緒に...」と仰られておりましたのに...。涙が溢れる思いである。



「竹取物語」舞台



[1972年第一次海外公演]

## 先生と佃煮の話

尾崎太一(日本音楽集団副代表)

30数年前の話。日本音楽集団、第一次ヨーロッパ公演の時の事でした。当時、東ヨーロッパには、日本食レストラン等は軒もなく日本の味に飢えていました。ある夜、ホテルの部屋で飲んでいた所へ、先生がフラッと入っていらして「これ貝新の佃煮、おいしいよ」としじみの佃煮を差し入れてくれました。そのおいしかった事。多分先生も大事に取っておかれた物だと思います。有りがとうございました。

## 長澤作品の温かさ

小野正志(創明音楽会)

長澤作品に共通していることを端的に言えば、様々な生活の中にとらえられた人々の息づかいが、書かれた音の一つ一つにみちみちている、と思えるのです。事象をとらえる視点は鋭いが、人を見る目は温かく、分け隔てがありません。長澤作品に接した時には、人の心に豊かさが増してくる事を感じています。

## 長澤勝俊先生の音楽

菊地悌子(箏曲演奏家)

現代邦楽創造の時代、「邦楽4人の会」の旧メンバーとして、共に新しい邦楽器の為の曲を委嘱し、演奏に情熱を燃やしておりました。この時代、「これでもか、これでもか」と思われる難解な音楽も沢山生まれたその中であって、長澤先生は何時も美しく、あたたかい音楽を生み出されていらっしゃいました。お人柄、又色々体験された上での信念から生まれた音楽だったのでしょう。これからも多くの方に愛され、演奏されてゆく事と思います。

## 優しさと厳しさと

杵屋勝芳寿(桐朋学園芸術短期大学客員教授)

「前は済みませんでした」。先生の作品を再演した時の事、改めて楽譜を読み返して作品の一方ならぬ奥行きに気づかされ本当に前回の演奏は恥じ入るばかりと冒頭の科白になりました。眼鏡の奥の優しい眼差しで笑って下さいました。しかしその中にご自身の作品に対する強い信念の「厳しい目」も...。若い人達にも一見易しく見えて厳しい音の世界を持つ先生の作品に取り組み、その厳しさを理解して欲しいと願いを伝えております。